

サルビア訪問リハビリ新聞

高幡まんじゅう
松盛堂



高幡まんじゅう 松盛堂

大正7年（一九一八年）に高幡不動尊の門前にのれんを構えた。名物は高幡まんじゅう。ある伝説と共に現在も多くの人が親しまれている。ある伝説とはホームページに書かれている為、興味のある方は調べてみては。食べる味わいや意味合いが変わりそうな内容です。

皆さんの声① 八十代 女性 Oさん

Oさんの家に訪問すると、よく玄関から多摩川の土手を穏やかな表情で眺めている。そのOさんの出身は東京都狛江市。狛江市で育ち、和泉多摩川駅から徒歩5分の場所に住んでいた。そしてOさんの父親は小田急線の駅員をされていた。時折、子供の頃のOさんは母親から父親の元にお弁当を持っていくよう頼まれた。それをOさんは快く持っていく。なぜなら父親の電車に乗せてもらえる事があったからだ。江の島や小田原へ行く事があり、今でも忘れない楽しかった思い出と話されている。電車から見える景色で覚えているのは、成城学園前駅のスーパー成城。ただ基本的にはのどかな景色が多かった。

そう、それはまるで今の家から眺めている景色に似ていると話される。だからいつもOさんは穏やかな表情で多摩川を眺めているのだろうか。

思い出に残る景色

子供の頃、私の実家の周りは畑が多かった。家の前でボール遊びをしていると、ボールが畑に入り畑のおじさんから、よく怒られた。今でもその時の様子を振り返ると思い出す事ができる。

ただ現在は畑が無くなり、その多くに家が建つ。所々に昔の景色が残っているものは、二、三十年でだいぶ景色が様変わりした。変化する新鮮さと、無くなってしまふ寂しさと。今日も時間は流れている。

訪問リハビリ新聞編集部員

佃 文王

皆さんの声②【後編】

六十代 男性 Kさん

二十代後半で筋トレとマラソンを始め三十代前半になった頃、満を持してホノルルマラソンに参加した。

ホノルル現地は暑い為、涼しい早朝にスタートする。本来であれば走る前にウォーミングアップをして走りやすいよう体を温めておく必要があった。体を温めておくことで筋肉が動かしやすくなるのだ。しかし、慣れない土地でスタート地点が分からず迷子になってしまったこともあり、ウォーミングアップの時間が取れなかった。とんだ誤算であった。もう焦っても仕方がない、本番の走りウォーミングアップと思って走りぬいてやる、そう決めてスタート位置についた。

スタートの合図と同時に列を飛び出し全速力で走った。十分ほど全速力で走り続け、短い間ではあったがその瞬間は確かに一位だった。



このまま全速力で走るのは体力的に持たないと思い減速していったことでどんどん後方に抜かれていったが、時間を確認しながらひたすら走り続けた。途中、朝日が昇っていくのも見え、とても綺麗だったのを覚えている。

その後、無事完走することができた。約三万七千人中千五十六位、三時間二十九分五十六秒で完走した。目標とする時間内で無事走り切ることが出来たのだ。走り終えた後はもう体が疲れ切ったがたがたであったが、達成感はとてもあった。

訪問リハビリ新聞編集部員

竹沢 美香

編集部員のつぶやき

私には二歳の息子が居る。成長に驚きつつ、喜びも感じる日々である。

十月に保育園での運動会があった。参加した競技には徒競走があり、①スタートラインに並び、②名前を呼ばれ返事をすると、③合図にてゴールまで走るといふ流れである。

実際の様子では、まずはスタートラインに5名ほどが並び、どこかに行ってしまう等、皆が並ぶのに時間がかかる。息子はしゃがんで砂いじりをしていて、ただ名前を呼ばれると真つすぐに手を挙げ返事ができる。それで満足したのか、ふらふらとどこかへ行ってしまう。再度スタートラインに連れて行かれると再び砂いじり。

スタートの合図が鳴るも砂遊び。保育士に促され走り出すも、後半はのんびりと行進。徒競走としての内容はともかく、我が子の初めての行事が見ることができ、感慨深い体験となった。初めて大勢が居る場での行事に泣き出す子もいると話聞いていたが、息子は我が道を行くタイプのようである。大物になるかもしれない。

訪問リハビリ新聞編集部員

